

第1回JICA-JISNASフォーラム 「アフリカ稲作開発を担う人材育成と日本の協力について」開催



JICA-JISNASフォーラム

大学は国際協力をどう考えているのか、JICAは大学にどう協力してもらいたいのか、これまではともすればこんな思いのすれ違いがありました。しかし、2009年11月、大学側による農学知的支援ネットワーク（JISNAS）の設立によって両者の意見交換が可能となりました。2011年7月14日、第1回JICA-JISNASフォーラムが東京農業大学で開催され、アフリカの留学生、JICA職員、文科省およびJISNAS運営委員やメンバー大学の教員など約50名が一同に会し、今後の協力方策を探る意図の下、JICAが進めているアフリカ稲作振興支援活動の中での人材育成、それに対する大学側の協力の可能性などについて、肩の力を抜いてそれぞれの思いを話し合いました。その中で研究者、普及員、行政官等の人材育成が重要であること、時間はかかるができるところから始めていくべきという指摘が重く感じられました。（浅沼修一）

JISNAS運営委員会・総会開催

第3回JISNAS運営委員会・総会が10月7日に開催され、グローバル人材育成に寄与する国際協力活動として、JICA青年海外協力隊事業と連携して大学院生（修士）を教育の一環としてアフリカ地域に派遣する事業の形成や、アフガニスタン留学生受入大学指導教員間のネットワーク形成などについて話し合われました。（伊藤圭介）

海外長期滞在研究者からの報告

ケニアでの稲作研究をおえて

ケニアでの研究生活を終え、10月末に日本に帰国しました。2009年11月に初めてケニアを訪れた際、ビクトリア湖の湖畔に並ぶ水田を見た時の感動は今でもよく覚えています。現地では赤道直下の大学として有名なマセノ大学にて「陸稲の耐旱性関連形質発現に影響する栽培環境要因」をテーマに、特に根系機能に着目して、圃場試験を行ってきました。その結果、品種の根系機能の発現が地点や施肥管理によって大きく異なり、それらが乾燥ストレス発現と関係することが明らかになりました。このことは適切な品種・栽培管理を通じた根系機能の調節により、特定の環境条件に特異的な耐旱性を付与できる可能性を意味し、近年の根系機能に関する遺伝的解析の急速な発展を考えれば、将来の耐旱性オーダーメイド育種につながる研究分野といえます。現地の試験環境は厳しく、猿・牛・モグラによる獣害や大学の電気代未払いによる停電など苦勞の連続でした。なによりアジアとは異なる文化の中で、人間関係は私生活面でも精神的ストレスになった一方で、いつも私を励ましてくれたのも、ともに働くケニア人研究者の仲間でした。この場にて、かけがえのない仲間達に感謝の意を述べさせていただきたいと思います。（浅井英利）



マセノ大学での収穫風景

ケニアの州境で暮らすナイロート系の人々の村で繰り広げられる民族間交流

ビクトリア湖岸の土壤荒廃が進む地域で、その原因となる土地利用の実態を明らかにする調査に着手して4年が経過しました。2009年3月、ビクトリア湖東岸のニャンザ州とリフトバレー州との境界に暮らす西ナイロート語群に属するルオ族の村に初めて長期滞在をするようになって間もないころ、夜10時から深夜2時ごろにかけてヒューイ！ヒューイ！と奇妙な音がするのに気がつきました。リフトバレー州側に住む南ナイロート語群のキプシギス族が牛を盗んでいくのです。奇妙な音は畜主がそれを近所に知らせ、警戒を促す合図でした。3、4月は週に一回程度であったウシ泥棒の訪問は5月に入るとほぼ毎日になり、けが人も出始めました。腹にすえかねたルオの人々がパトロール隊を結成し、夜、村の中を巡回し始めました。10日ほど後、ウシ泥棒集団の中の2人が捕まり、村の人々によって殺されました。写真はウシ泥棒が殺された翌朝、まだ興奮冷めやらぬ人々の様子です。手には弓や棍棒、大鉞が握られています。自給用の作物も満足に生産できない厳しい環境で生活するこの村の人々にとって、ウシは非常に貴重な財産であり、それを守るためには仕方のない行動だったのです。（山根裕子）



牛泥棒を退治し意気揚々とするルオ族の人々